令和2年度学術研究動向等に関する調査研究　報告概要（人文学専門調査班）

英文学および英語圏文学関連分野に関する学術研究動向―英文学、英語圏文学研究におけるグローバリゼーションとマルティエスニシティ（継続）

新井　潤美（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

英文学、英語圏文学研究の様々な分野においてグローバリゼーションとマルティエスニシティの問題は、political correctness や woke、snowflake といったコンセプトがアカデミズムにおいてだけでなくメディアでも一層注目される現代の状況のなかで、その重要性はさらに高まっている。英米文学をはじめとする英語圏文学、文化が大学などの高等教育施設でいかなる方法で研究され、教えられるべきかという問題は欧米やアジア、そして日本においても大きな課題であり続ける。

イギリスにおいては特に近年、マルティカルチャー、マルティエスニシティが強く意識され、奴隷貿易や植民地主義の歴史が再認識され、博物館の展示、演劇、映画といった媒体によって、広くその認識を共有させる試みがなされている。しかしその一方で、ナショナル・アイデンティティへの関心や意識が高まるという現象も見られ、「イングリッシュネス」や帝国主義の研究にもつながっている。さらにはイギリスの EU 離脱問題が、イギリスの国民意識、ナショナル・アイデンティティの確認、マルティカルチュアリズムの否定といった、思想的な問題との関連において、様々な分野で注目され続ける。こうした中、文学研究において政治、経済、社会、歴史、文化、ジェンダー研究等多様な視点がさらに重要視される一方で、文学テクストを精読して分析するという「伝統的な」文学研究のアプローチの重要性もさらに強調され、文学研究の方法論に関する議論は多様化していく。

このような状況の中で、英文学、英語圏文学・文化研究および比較文学・文化研究がどのような展開をしていくのか、日本および海外の研究の動向を引き続き調査した。令和２年３月には英国で大英図書館にて資料収集を行うことができたが、その後の新型コロナ感染の広がりによって海外でも日本国内でも対面式の学会は次々とキャンセルされる状況になった。しかし夏以降は研究会や学会がオンラインで開催され始め、最初に計画したのとは異なった形式や方法ではあるが、引き続き研究、調査を進めることが可能となった。新型コロナ感染の広がりにより海外出張ができなかった分、zoom によるヴァーチュアル・コンフェレンスが盛んに行われるようになったので、時差が許す限りイギリスで開催された研究会や講演会、舞台芸術発表会などに参加することができた。また、これまでの研究成果を単行本にまとめるという作業が進捗している。

宗教学関連分野に関する学術研究動向――人工知能・ロボットの社会的実装に対する宗教学的応答の新たな潮流と展開

小原　克博（同志社大学 神学部・教授）

2020 年度においても人工知能（AI）や AI を実装したロボットに関連する書籍が国内外で多数刊行されたが、AI ブーム初期の頃に見られたような極端な楽観論や悲観論ではなく、全体像を学術的視点から、バランス良く俯瞰させる良書が少しずつ現れている。AI やロボットに関しては情報系の分野からの発信だけでなく、近年、人文社会系からの発信も増えてきた。それは AI の社会実装が、社会の構造を変える可能性や、AI の進展に見合った倫理規範の必要性が認識されつつあることを示している。膨大な情報を収集・分析する機械学習により、AI が人間の潜在的な差別を読み取り、さらにはそれを助長する可能性もすでに指摘されている。そうした課題を受けて、2019 年 12 月、人工知能学会倫理委員会は「機械学習と公平性に関する声明」を発表した。

それに呼応するかのように、法学分野においても、AI を扱った文献が多数現れている。たとえば、小塚荘一郎『AI の時代と法』（岩波新書、2019 年）において、著者は、AI の利用が普及し、データの価値が増大する時代には「モノからサービスへ」「財物からデータへ」「法／契約からコードへ」という変化が生じると語る。

こうした大きな社会変化が人間精神や人間理解に及ぼす影響を考察する領域の一つとして宗教学を挙げることができる。日本宗教学会の 2020 年度学術大会では「AI と宗教――AI と世界観・神観念」「AI と宗教――AI・ロボッ

トの日本文化における受容を考える」という二つの AI 関係のパネルが開催された。私自身は前者におけるパネリストとして研究発表したが、様々な領域の研究者が多数参加し、活発な議論が交わされた。

AI を強化すればするほど、それとの比較の中に人間は置かれることになる。それゆえ、すぐれた「知能」を備えた理性的・合理的・自律的な人間類型が、人間理解の基準とされるとき、そこから、こぼれ落ちるものに絶えず注意を向ける必要がある。同様に、「最適化」技術によって、我々が失いつつあるものが何かを対象化する必要がある。そうした作業の一端を宗教研究は担うことができると言える。

日本文学分野に関する学術研究動向―人文学としての社会性に着目して―

佐倉 由泰（東北大学大学院文学研究科・教授）

本調査研究は、前年度 2019 年度の調査研究「日本文学分野に関する学術研究動向―人文学としての根源性に着目して―」の継承、発展を期するもので、日本文学分野に関する学術研究が、文化的存在としての人間のあり方を根源的に問う人文学の特性を生かして、どのような社会性を具え、いかなる社会的展開をなし得るのかという関心を持って、その研究動向を調査し考究した。主な調査対象は、日本文学分野にかかわる学会・研究会の開催、文学館・史料館・博物館・美術館の展示や、書籍（雑誌を含む）の記述である。ただし、本調査研究の実施期間の 2020 年度は、計画段階では予測し得なかった新型コロナウイルスの感染拡大の深刻さにより、学会・研究会、文学館・史料館・博物館・美術館の多くの活動が計画の中止や変更を余儀なくされたため、学術研究動向の検討に特段の留意と工夫を要することとなった。そうした中での調査・研究は多岐にわたるものとなったが、その全体は大きく次の四つに区分できる。

（１）学界活動の調査・研究

（２）近時に刊行された関連分野の学術書、学術雑誌の調査・研究

（３）日本文学の人文学としての特性を意識した活動の実践

（４）日本文学に関する学術活動、文化活動の深層の動きを捉えるための調査・研究

（１）では、春季から夏季にかけて、多くの催しが中止を余儀なくされる一方、秋季以降、さまざまな工夫を凝らしたオンラインでの開催が続く状況に接した。今後学界がコロナ禍の前の状態に戻ることを志向する中でも、2020 年度に突如現れた動向は、多くの一過性を含みつつも、従来重んじてきた先例の大きな見直しを促す重要な契機になるものと考えられる。

（２）では、コロナ禍の中の困難な状況にあっても、以前と変わることなく研究活動、出版活動を継続しようとするさまざまな意志と努力の成果に接した。ただし、この調査・研究の対象となった学術書、学術雑誌のほとんどが、コロナ禍以前に構想され、計画されたものであるということは看過できない。その意味で、構想、計画の段階からコロナ禍の影響を受けた、今後の学術書、学術雑誌の刊行のあり方と記述内容には十分に注意を払う必要があると考えている。

（３）は、文化的存在としての人間のあり方を根源的に問う人文学の特性を生かした、日本文学にかかわる学術活動、文化活動の実践を通して、研究動向の現況に深く立ち入り、その実態を身近に詳しく捉えようとするものである。その中で、論文、「たけしばの記述から見る『更級日記』―なびく瓢に共振するもの―」（和田律子・福家俊幸編『更級日記 上洛の記千年―東国からの視座』〈武蔵野書院、2020 年 7 月〉）、解説、松尾葦江編『軍記物語講座第二巻 無常の鐘声―平家物語』（花鳥社、 2020 年 7 月）「まえがき」、研究報告、「狩野文庫の研究・教育での活用について」〔東北大学狩野文庫デジタルアーカイブシンポジウム「江戸に学び、江戸に遊ぶ」 パネルディスカッション、2020 年 12 月 20 日，東北大学（オンライン開催）〕の発表等の活動の実践を通して、人文学の本質に根ざした学術活動を行うことの意義と可能性について重要な知見を得ることができた。

（４）では、（１）と（２）の調査・研究で捉えることのできた顕在化した動向とは別に、その深層にあって見えない形で進行しつつある日本文学にかかわる根源的な認識の変化を捉える観点を得ることをめざした。その中で、あ

えて過去に遡り、従来の研究史を捉え直し、「文学」、「文学史」、「日本」、「地域」といった概念をめぐる思考の経緯とその可能性を考究する調査・研究も行った。このような調査・研究は、学術研究動向を調査すること自体の原点となるその対象と目的と方法を問い直す意味を持ったが、そこで得られた知見はたいへん得難く貴重なものであった。

文化人類学および民俗学関連分野に関する学術研究動向－文化人類学における多種間ネットワークに関する新たな研究動向

宮脇　幸生（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科・教授）

日本におけるマルチスピーシーズ・エスノグラフィの受容と展開について調査を行った。マルチスピーシーズ・エスノグラフィは、2000 年代からアメリカを中心として盛んになってきたジャンルである。文化人類学・人文地理学を中心とした学際的な研究領域で、人間を含む複数の生物間の関係を、脱人間中心主義的な観点から明らかにしようとするアプローチである。だがその内実は多様で、存在論的転換を提起する哲学的議論から、商品となる生物の商品連鎖に沿って人と生物・モノの絡まり合いを明らかにするマルチサイテッド・エスノグラフィまでさまざまである。また取り上げられる生物も、陸生哺乳類・鳥類から、海洋生物、昆虫、植物、菌類、ウィルスまで多様である。

日本でも 2010 年頃から、マルチスピーシーズ・エスノグラフィの影響を受けた研究が公表され始めた。当初は、現代思想に影響を受けた「存在論的転換」を謳う現象学的アプローチのフィールドへの応用が中心であり、アメリカで見られるような多様な展開は見られなかった。またそれまで日本の生態人類学や認識人類学において蓄積されてきたヒト・動植物間関係についての研究の批判的継承も、十分になされていたとはいえない。

だが 2010 年代半ばから、これまでの研究の批判的継承の上に立った研究もなされるようになり、それが日本におけるマルチスピーシーズ・エスノグラフィの展開に影響を与えてきているように思われる。また人間－動物間の相互作用の現象学的分析にとどまらず、より広範なフィールドを対象とする商品連鎖に関する研究もなされ始めている。さらに現代思想との連携だけでなく、より多彩な研究領域との学際的な研究成果もじょじょに現れつつある。現在、日本におけるマルチスピーシーズ・エスノグラフィでは、ベテランから中堅・若手まで広い年代の研究者たちが、非常に精力的に研究を展開している。今後の展開に大きな期待を持つことができる研究分野であると言える。

言語学関連（理論言語学）分野に関する学術研究動向：文の構造と意味についての新たな潮流

上山　あゆみ（九州大学大学院人文科学研究院・教授）

言語学の分野では、(1) さまざまな言語について、その用いられ方や変化に関する記述的研究、(2) 記述的研究に基づき、そのどの部分が言語の中核となる計算システムの反映であるかを考察する理論的研究、(3) 脳波や行動実験などを通して、さまざまな認知システムの関わり方を考察する心理学的研究、(4) 語学教育への応用、などが主に行われているが、近年、特に、工学的な言語処理や人工知能などの関連領域との接点を探ろうとする動きが目立つ。日本語文法学会では、2020 年の大会において「数理的アプローチで迫ることばの姿：これまでの取り組みと文法への応用」というシンポジウムが行われ、日本言語学会では、2021 年の大会において「言語の科学とテクノロジーが描く未来社会のビジョン」というシンポジウムが予定されていることが示唆的である。また、(1)のタイプの研究に関しては、対面調査や内省に基づくものではなく、大規模コーパスを材料とするものが年々増加傾向にある。

理論的研究においては、言語の中核となる計算システムの出力において、形式と意味がどのように表示され、それが他の認知システムと関わることによって、どのように観察可能なあらわれになるのか、明示的にモデル化して考察することが最も重要な課題であると考えている。その際に無視できないのが、脳内辞書（レキシコン Lexicon）の具体的な記述である。昨今は、ディープラーニングの技術の発達により、必ずしも辞書記述をしなくても人工知能が文

の中に含まれている単語を認識できるということが知られているが、それだけでは、「文の意味がわかる」という状態とはほど遠い。翻訳などの特定の作業については、記号の対応関係を大量に学習させることにより、かなり精度を上げることが可能になってきているが、人工知能はいまだに、「意味」を理解しないまま、記号のやりとりをしているだけであり、その記号に「意味」を結び付ける方策こそが人工知能の質的な変化をもたらすものであると思う。

美術史関連（西洋古代・中世）分野に関する学術研究動向――美術史研究機関の情報発信にみられる新たな潮流――

加藤　磨珠枝（立教大学文学部・教授）

本調査研究では、国内の美術史研究・教育機関の展示空間を中心に、所蔵品および文化財、資料に関する最新の研究成果をいかに情報公開し、新しい文化の創造につなげていくかを模索する具体的な取り組みについて調査した。本年度は、渡航制限のため海外調査が実現不可能であったため、調査可能な国内機関に焦点を絞った。

近年に見られる展示傾向の一つとして、これまで歴史上、軽視されてきた社会的少数者（マイノリティ）や女性、貧困層など社会的弱者の視点を反映した情報発信が挙げられる。たとえば、日本においてはアイヌ文化（歴史、伝統工芸、言語等）を継承し、その振興や普及啓発を目的とする「ウポポイ民族共生象徴空間」（国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設）の開業（2020 年 7 月 12 日）は代表的である。以上の現状理解にもとづいて、2020 年 9 月 12 日～16 日に北海道の飛生、白老、小樽、札幌の実地調査を中心に、研究成果を踏まえた展示法の新たな潮流について調査を実施した。

そこでは、研究対象としての作品（繊細な刺繍や染織物、儀礼道具の数々）の保存環境が整えられ、造形美の理解を深める優れた鑑賞空間が創出されている一方で、これら展示物を歴史的文脈で理解する解説類については十全とはいいがたく、近代日本の植民地主義政策におけるアイヌ民族の位置づけは曖昧であった。民族を存続の危機に陥れたのは誰なのか、その主体たる「和人」の責任をどうとらえるのか、という真の意味での民族共生の未来に向けた提言にまでは至っていなかった。

近年の美術史学、博物館学の新たな潮流として、マイノリティのまなざしの具現化とともに「アーカイヴ」の重要性も挙げられる。それは、無文字社会におけるイメージの意義、記憶の継承のための人類学など、多種多様な学問領域を体系化し、各種の表現メディアを架橋する分野横断的な可能性を示し、最新技術を用いた情報データのデジタル化とその展示はさらに本格化していくと考えられる。

ヨーロッパ史およびアメリカ史、アジア史およびアフリカ史（地中海史）に関する学術研究動向と新たな潮流　グローバリゼーションの中での交流の諸相

亀長　洋子（学習院大学文学部史学科・教授）

現代社会におけるグローバリゼーションの進展のなか、中世・近世史の歴史学の分野においても、交流史など、異文化接触とその影響に関する研究が盛んになってきている。とりわけ、ヨーロッパ、アジア、アフリカにまたがる地中海世界はその研究対象として格好の素材を提供している。同時に、この分野は、西洋史と東洋史の両分野にまたがる多元的な世界であるがゆえ、研究者自身が学問的交流や研究の発信方法などをどのように意識して研究活動を行なっているかを知ることは、学問の進展上極めて重要である。こうした問題意識に基づき、2020 年度に二つの調査を行った。

一つは、中世史分野では最大規模の国際学会である、イギリス、リーズ大学主催の国際中世学会（International Medieval Congress）の参加者の動向調査である。この学会は毎年 7 月に行われ、報告資格には制限がないこともあり参加者は 60 カ国以上、報告者数だけでも 2000 人以上という、数多くの中世研究者が集う場となっている。日本人も、日本での研究プロジェクトの成果発表の場としてセッション開催の形で申し込み同学会を活用する研究チーム、海外留学中の学生の発表、全く個人でのエントリーなど、多くはないがさまざまな企画の一環として同学会で報告し

ている。

しかしながら、同学会の 2018 年、2019 年の同学会での報告者とその属するセッション名を見るに、報告資格やジャンルが厳格でないにもかかわらず、地中海圏の東洋史分野の研究者の参加は世界的にもごくわずかのように思われる。ユダヤ教・ユダヤ人関連について、ユダヤ人と思われる個人名を持つ研究者の参加は比較的多い。しかしムスリム名を持つと思われる研究者の報告はごく僅かである。報告者の多い大規模学会においても、東洋史と西洋史の研究交流はまだ立ち遅れているように思えた。

加えて、中近世地中海史に関する文献の動向を調査した。異なる言語を母語として有する地中海史の研究者たちが利用する史料や刊行形式、また共同研究の様相などに注目しながら文献を収集した。その結果、イギリスの若手研究者の環地中海圏の歴史への関心の高まり、ロシア人やギリシア人による博士論文の英語での専門書刊行、海賊、捕虜、領事、奴隷といった異文化接触に深く関係する人の属性に関する研究の活発化などが見られた。テーマと担い手の両面で、中近世地中海史は新たな発信力を有し、活況を呈しつつあるように思われる。地中海史のような多言語世界では、読者の数の可能性を広げる英語での文献刊行は他分野にも増して重要であることを理解しての刊行状況とも感じた。その一方で、論文集などで、ヨーロッパ側の研究者とムスリムの研究者との両方が数多く名を連ねるものは、一部には若手による意欲的な研究も存在するもののまだ多いとはいえず、学会報告の傾向と同様、これからの課題として残されている。